

ホボヘミアと「寄せ場」

——「寄せ場」の社会変動研究へ向けて——

吉田竜司

はじめに

1920年代アメリカ合衆国。禁酒法時代ただ中のシカゴにおいて、「メイン・ステム (main stem)」と呼ばれる移動性の季節労働者を中心とする集住地区が存在していた。そこに集まる人々は、「ホボ(hobo)」と総称される、いわゆる「ホームレス」の人々であった。当時シカゴ大学大学院に在学中だったN・アンダーソンは、彼の著書『ホボ』の中で「メイン・ステム」を含む当時のシカゴにおけるホームレスの集住地区「ホボヘミア (hobohemia)」の参与観察を通して、そこに住む人々についての生き生きとした描写を行った。

ただ、その中で描写されているホボヘミアの具体的なありようが、日本における日雇労働者の集住地区(ドヤ街)である「寄せ場」と非常に近似的な相貌を有することについては、あまり知られていない。例えば、青木は寄せ場の定義問題について論じる中で、スラムやゲトロー、スキッド・ロウ(skid row)との比較を行い、それらよりも日本の「寄せ場」は、むしろホボヘミアに近いとの指摘を行っている⁰⁾。ただしここでは単なる指摘にとどまっており、青木はアンダーソンの著した本書の内容に踏み込んで、ホボヘミアと「寄せ場」とがどのように類似しているのかについては述べてはいないのである。

そこで本稿では、N・アンダーソンの『ホボ』を中心に、ホボヘミアという、かつてアメリカに存在した「寄せ場」が有していた都市生態学的特徴を、日本の「寄せ場」と比較しつつ、紹介する。そして、それがその後辿った歴史的運命を日本の「寄せ場」と比較検討し、両者の類似性および相違を浮き彫りにする中から、「寄せ場」に関する一つの新たな

⁰⁾「寄せ場は、移動する単身の日雇労働者の街である点で、スラムやゲトローやスキッド・ローと異なる。スラムやゲトローは、家族を持たない人々homelessの居住地ではない。スキッド・ローは、日雇労働者よりも窮乏者pauperを中心とする街である。寄せ場は、むしろN・アンダーソンが描いた、季節労働者seasonal worker,ホボhobo, ホームガードhome guardを中心とするホボヘミアhobohemiaに近い。時代と社会を異にするが、それらは、単身の臨時的労働者の街である点で、似ている。」(青木,1989b,pp.145-146.)

な問題領域を提出したい。

1 寄せ場・ドヤ街・「寄せ場」

ホボヘミアと「寄せ場」の比較研究という本稿の目的を適切に位置づけるためには、まず寄せ場とドヤ街についての、若干の概念整理が必要であろう。

寄せ場は、「日雇い労働者の集住地区」であるとも、単に「ドヤ街」であるとも説明される。それは日本全国に散在し、大阪の釜ヶ崎、東京の山谷、横浜の寿、名古屋の笹島、広島の前など代表的である。

しかしながら、寄せ場を単にドヤ街として定義することは、寄せ場の持つ本質的機能を過小に評価してしまう恐れがある。この点に関し、青木は次のように述べている。「元来、『寄せ場』と、日雇労働者が宿泊するドヤ(宿)が密集する簡易宿泊所街とは、別のものである。前者は、労働者の労働過程に対応し、後者は、労働者の生活過程に対応する(青木,1988,p.41.)」すなわち、寄せ場の本質的機能は、日雇労働者の就労の斡旋・紹介機能にあるのであり、具体的には、笹島や、最近の東京における高田馬場近辺など、必ずしも簡易宿泊所を有するとは限らない、時間的に限定された空間をも含む概念である。それに対し、ドヤ街は、寄せ場を中心として形成されるものであることから⁽²⁾、多くの場合寄せ場＝ドヤ街であるのだが、その本質的機能(生活過程)は寄せ場の持つそれ(労働過程)とは区別する必要がある。

このように、本稿では青木によって指摘された、〈ドヤ街＝生活過程〉、〈寄せ場＝労働過程〉とする捉え方に従って、ドヤ街を(広義の)寄せ場と重なり合いながらも相対的に異なるカテゴリーとして概念化する。その際に具体的に念頭に置いているのは、主に大阪市西成区の(通称)釜ヶ崎である。ただ、釜ヶ崎をドヤ街とすると、その地区が持つ生活過程としての機能に視点が限定される恐れがあるので、本稿では必然的に寄せ場(労働過程)機能を含んだドヤ街として、括弧付きの「寄せ場」を用いる⁽³⁾。したがって、以下の諸節において、ホボヘミアとの比較において用いる「寄せ場」という語は、上記のような概念的な「含み」を有するものであることを断っておく。

⁽²⁾寄せ場の成立過程について、それが江戸時代後半の無宿人を日雇い労働者として収容した「人足寄せ場」「極貧堀」に遡ることが、釋(1989)、松繁(1992-3)等によって指摘されている。

⁽³⁾同様の概念規定は、中根も行っている。「私は、『寄せ場』を労働過程に限定するカテゴリーとしてではなく、生活過程をも含めた問題を射程に入れた概念としてここでおさえておく。……(略)……周辺に『ドヤ街』を持つ『寄せ場』は、日雇労働者の就労場所であるとともに、生活の場所でもある。」(中根,1993,p.8)

2 従来の「寄せ場」の比較研究と本稿の位置づけ

我が国の「寄せ場」の比較研究において、その比較対象としてホボヘミアに注目することは、上述の青木を除いても、必ずしも全く新しい視点というわけではない。

「日本寄せ場学会」発行の『寄せ場』創刊号(1988)には、見返しに「創立の呼びかけ」が記されている。その中で、幾つか掲げられている学会設立目的の一つに、「寄せ場およびスラムの国際比較研究を目指すこと」がある。実際この設立目的に沿った研究が幾つかなされてきているが、ホボヘミアに注目した研究は未だないのである。

ところが、「寄せ場学会」設立以前の1960年代における我が国の都市社会学者達にとっては、ホボヘミアは「寄せ場」を考える上で、少なくとも念頭には置かれる存在であった。ただ、彼らは主に社会解体論におけるスラム研究という視点から、「寄せ場」をドヤ街として捉えていたため、同時代の解体地域という視点から選定された比較対象は、もっぱら当時のアメリカにおけるスラム地域であるスキッド・ロウ(skid row)に向けられていたのであった。そこで言及されるホボヘミアは、後述するように、もはやスキッド・ロウになってしまったスラム地域の前身としてしか位置づけられていないのである⁽⁴⁾。すなわち彼らの比較は、あくまで<ドヤ街 対 スキッド・ロウ>という対でしかなかったのである。

こうした視点からの研究は、労働を含めた意味での「寄せ場」の比較とは言い難い。そしてこのような社会解体論的な視点からの寄せ場研究が、内在的に「寄せ場」に対する差別的視点を内包していたがために、「寄せ場」の持つ本来的機能としての労働過程を正当に評価できず、結果的に「寄せ場」および寄せ場労働者に対する常識的で差別的な眼差しの再生産に与することにしかなかったことは、「寄せ場学会」はじめその後多くの論者によってつとに指摘されているところである(小柳,1980.;中根,1993.他)⁽⁵⁾。

しかしながら、同時にその社会解体論的視点が図らずも含んでいた、同時代的比較という方法は批判的に対自化されることなく、現在の寄せ場をめぐる比較研究にも採用されている(青木,1989a.;山崎,1989.)ため、現在では寄せ場の比較研究にとってホボヘミアはいわば「忘れ去られた」存在となっている。このことには次の二つの原因があると考えられる。一つは上述のような「寄せ場学会」による1960年代都市社会学に対するイデオロギー批判

⁽⁴⁾「1960年代のシカゴのドヤ街は、1920年代にHoboに代表された労働力のプールとしての面影はすでになく、今やアルコール中毒患者・老齢廃疾者のたまり場と化しつつある。」(土田 a,1966,p.63)

⁽⁵⁾1960年代都市社会学に対するこのようなイデオロギー批判は、「寄せ場学会」の共通理解としてほぼ全ての学会員に共有されているようである。

である。アメリカにおいて逸脱のラベリング論をめぐる議論の途上で、ゲールドナーが行ったイデオロギー批判⁶⁾にも見られるように、この手の批判がいったんなされると、その後の研究において、批判対象の全否定と同時に、それが抱えていた方法論的問題点を批判的に問うことなく放置される傾向にある。そしてもう一つは、ホボヘミアという社会的存在様式の一過性である。後述するように、ホボヘミアは1920年代禁酒法時代の「徒花」的存在として、既に『ホボ』が書かれたときには消えゆく存在であった。このことが、現在なお存続している我が国の「寄せ場」にとって、比較の対象足りうと見なされなくしているのであろう。

だが、そうであるからこそ、われわれはホボヘミアを比較の対象とすべきだろう。というのは、そこからは、(後述するように)「寄せ場」という独特の社会的存在様式を、新たに捉え直す視点が生まれるからである。

では、以上のような問題関心に従って、前節において概念定義を行った「寄せ場」における生活過程と労働過程という視点から、そしてまた「寄せ場」との比較を念頭に置きつつ、われわれは『ホボ』に描かれたホボヘミアを見ていくことにしよう。

3 N・アンダーソン「ホボ」⁷⁾

1) ホボヘミアの概観

ホボとはどのような人々なのか。アンダーソンは、本書のタイトルから抱かれる、こうした「素人」の興味に安易に答えることはせず、まずホボヘミアという「ホームレスの住処(the home of the homeless man)」に読者を案内する。

ホボヘミアは、シカゴの中心商業地区である「ループ(loop)」を取り囲むようにして、東西南北の四地区にわたって存在していた。

ループの西側、「メイン・ステム(main stem)⁸⁾」「ステム」あるいは「メイン・ドラッグ(main drag)」と呼ばれるウエスト・マディソン通りが、シカゴのホームレス達の中心地

⁶⁾ゲールドナーは、ベッカーの理論的主張(負け犬の側に立つ)と実践的問題関心(逸脱者の研究)の間に矛盾があることを指摘し、その原因を福祉国家体制のエリート・イデオロギーに求める。(Gouldner,1968.)

⁷⁾本節では、紙幅の関係上、また「寄せ場」との比較という問題関心から『ホボ』を読む。したがって、本書の構成に忠実にその内容をまんべんなく紹介することはできない。そうした作業はまた別の機会に譲るとして、ここでは、「寄せ場」との対比があらわになるようなホボヘミアの地域的・文化的特徴に関する記述だけに注目し、紹介する。

⁸⁾街の目抜き通り(main street)を意味する彼らのジャーゴン(Anderson,1923,p.3.)。

である。そこはまた「奴隷市場(slave market)」とも呼ばれるように、多数の労働紹介所を中心とした地区で、安食堂、安宿、飲み屋、散髪学校⁽⁹⁾等があり、まさにホームレスの「目抜き通り」である。基本的には働く男の街⁽¹⁰⁾であるが、ここには麻薬の売人(dope peddler)、酒の密売人(bootlegger)、「シノギヤ(jack roller)⁽¹¹⁾」、行商、物乞い(beggars)や身障者、年老いた者まで、ホボヘミアに集まるあらゆる種類の人間が見られる。

ループ南側のステイト通りは、ホボヘミアの中でも「娯楽場(playground)」的な性格を有する地区である。ここにはバーレスク・ショーがあり、ホボヘミアの男たちは、「水着の美人(bathing beauties)」の異国情緒溢れる踊りを楽しみに来る。他の地区との際だった違いは、この地区には女性が多いことである。ここには労働紹介所はない。かわりに、冬場になると多くの季節労働者がこの近辺の安宿に逗留して、夏場のために込んだ金で春が来るまでを過ごすのである⁽¹²⁾。また、このあたりの南西部には広大な鉄道敷地があり、そこは夏場には野宿する(pass the night)のにちょうど良い場所となる。

北側に目を転じてみると、そこは「バグハウス広場(bughouse square)⁽¹³⁾」と呼ばれる、インテリホボ(hobo intellectuals)の集まるワシントン広場を中心とした地区である。ここでは、天気の良い日曜や休日の晩には、さまざまな種類の「ヨタ者(go-about)」が集まり、街頭弁士の演説を聞くとともになしに聞いて暇をつぶしている。

最後に、ループの東側のミシガン湖岸に沿ったグラント公園は、野宿の好適地である。自然史博物館裏には「ジャングル」と呼ばれる掘っ建て小屋の集まる野営地があり、ここでは男たちが洗濯をしたり、身体を洗ったり、髭を剃ったり、靴を直したり、また湖面に糸をたらして暇をつぶしている姿が見られるのである。

⁽⁹⁾昭和38年当時の釜ヶ崎にも散髪学校があった。「センターからほど遠くないところに、散髪学校があって、ここから無料散髪券が配布されるが、センターの労働者でこれを利用するものは毎月40名前後にのぼっている。」(西成労働福祉センター,1963,p.17)

⁽¹⁰⁾誤解無きように述べておくと、ホボヘミアは基本的にはホボにとって生活の場であって、そこで労働に携わる場ではない(この点においても「寄せ場」と同様である)。労働紹介所で紹介される仕事として彼らが求めているのは、後述するように、長旅(shipment)を伴うなるべく遠方の仕事である。

⁽¹¹⁾路上で寝ている者の懐から金品を盗む者。「寄せ場」では「シノギヤ」と呼ばれる。ジャック・ローラーについては宝月(1990,pp.178-223)を参照。

⁽¹²⁾「彼らの多くにとって、ホボヘミアのホテルは冬場のリゾートであり、そこで彼らは次のシーズンまで働かずに夏場に備けた金で過ごすのである。」(Anderson,1923,p.90.)

⁽¹³⁾“bughouse”とは「気ちがい病院」の意である。

2) ホボのタイプ

ホボには、どのような人々が含まれるのか。彼らを指す呼び名「ホボ(hobo)」は、一説によるならば、"hoe-boy"⁽¹⁴⁾から来ていると言われる(Anderson,1923,p.88.)ように、元々「ホボ」は農場の収穫作業に携わる季節労働者を指す語であったと考えられている。また、「ホームレス(homeless men)」という語も、アンダーソンは、A・ソーレンバーガーが著した『1000人のホームレス達』に倣って用いている。ソーレンバーガーは、その中で「ホームレス」を、壮健な単身の移動性の労働者を真っ先に含めた形で定義している⁽¹⁵⁾。ここから分かるように、当時「ホボ」あるいは「ホームレス」という語に含まれていた意味内容は、スキッド・ロウからイメージされる「窮貧者」あるいは、1980年代に入ってアメリカ合衆国で社会問題化したいわゆる「ホームレス問題」から連想される「失業者」としてのイメージよりもずっと広く捉えられていたということを確認しておく必要がある。すなわち、「ホボ」を含む「ホームレス」という語には、単に家族生活を営まない単身者全てを含み、またそこには「労働者」「移動性」という意味内容が分かち難く結びついていたのである。

さてアンダーソンは、ホボヘミアの住人を総体として表す語として上記のような意味合いにおける「ホームレス」が最も適切であるとした上で、彼らを次の五つのタイプに分類している。

まず季節労働者について、彼らはアッパークラスのホボであり、季節ごとの決まった職を持って、年間を通して州にまたがって移動する。例えば夏は南部の繊維産業に従事し、冬にはホボヘミアに来て日雇いの臨時職で食いつなぐ者。また、夏は南部で果物の収穫に従事し、冬は他の州で機械工として働く者等である。「彼らの多くにとって、ホボヘミアのホテルは冬場のリゾートであり、そこで彼らは次のシーズンまで働かずに夏場に儲けた金で過ごすのである(Anderson,1923,p.90.)」。

「ホボヘミア」という名称の元となった(狭義の)ホボは、ホボヘミアの主役であり、彼らは時間や季節を気にせず、たまたま気に入った仕事なら何でもする。ただしその仕事は長旅(shipment)を伴う遠方の仕事であればある程良い。彼らはホボヘミアの労働紹介所でそのような仕事を探し、鉄道をタダ乗り(shipping)して全国を移動する。ちなみにこの鉄道のタダ乗りには、鉄道警察による監視の目を盗んだり、運行中の列車への飛び乗り、

⁽¹⁴⁾ちなみに"hoe"とは「鋤」という意味である。

⁽¹⁵⁾「ホームレスは、家族を持たない壮健な労働者であることもあるし、家出少年であることもある。病氣療養の途上で行き詰まった肺病患者であることもあるし、責任能力を欠いた精神薄弱者であることもある。」(Solenberger,1911,p.209.)

飛び降りといった大変な危険が伴う。だがこの危険をくぐり抜けることも、彼らの手柄話の種となる。彼らは、たまたま失業中であれば物乞いさえすることもあるが、生活は基本的に仕事によって得た金で成り立っている⁽¹⁶⁾。移動性の労働者の大半はこのタイプである。また、「フロンティア・ライン」の消滅が報告されて以降のアメリカ社会において、彼らは「遅れてきた開拓者(belated frontiersmen)」(Anderson,1923,p.92.)としてのノスタルジックで、ロマンティックな存在でもあった。それは彼ら自身も⁽¹⁷⁾、彼らを見る世間の眼差しも⁽¹⁸⁾が付与していた、かつての開拓者が占めていた位置と気概であり、例えば次のような言葉によく表現されている。「もし東で景気が悪ければ、彼らは西へ行く。もし北が退屈ならば、彼らは南へ行く。「四十八州あるんだし、その内のひとつで仕事にありつけばいいのさ」が彼らのスローガンだった(Anderson,1940,p.11.)⁽¹⁹⁾」。このようなロマンティックな存在のありようが、移動性の集団としてのホボの特殊性や、ホボヘミア独特の文化的相貌を成り立たせていたといえるだろう。

ホボはしばしばトランプと呼ばれることがあるが、ホボ自身は、自らはトランプではないと、両者を厳密に区別する。なぜなら、トランプは働くことよりも、国中を見て新しい経験を得たいというロマンティックな衝動を持つ放浪者(wanderer)だからである。彼らは、少年時代に読んだ冒険物語のヒーローに自らを同一視し、したがってその旅心(wanderlust)に支配された彼らの存在は、家庭に不満を持つ少年達をその道に引き入れる要因にもなっている(Anderson,1923,p.85.)。また彼らは、(後述するような)生き抜くためのさまざまな手段を駆使する(シノグ)ことに長けている。その中にはホボと同様に、鉄道のタダ乗りも含まれる。例えば、ある45歳になるトランプは、片親家庭から10代後半で反抗し家出し、全国津々浦々を旅し続けている。彼は旅の先々で小冊子を売り、それで得た金はギャンブルに使ってしまうという生活を続けている(Anderson,1923,pp.94-95.)。

以上が、ホボヘミアにおける移動層であるが、残る二つは、ホボヘミアを減多に出るこ

⁽¹⁶⁾「彼らはいつでもゴツイ手と労働者の物腰をしている。彼は仕事をして生きていこうとしているのだ。」(Anderson,1923,p.92.)

⁽¹⁷⁾「ホボはハリウッド以前のカウボーイや、木こりのポール・バニヤン伝説に自らをなぞらえるのである。」(Anderson,1940,p.21.)

⁽¹⁸⁾当時はまだ「ポール・バニヤン伝説」のような伝統的アメリカンヒーロー像や、ダイヤモンド・ノヴェルに登場する「デスペラード」達が一般に流通していた時代である。(亀井,1993,pp.181-191.;pp.226-235.)

⁽¹⁹⁾1960年代の「寄せ場」労働者の中にも、次のような気概は息づいており、これと重ね合わせることができるだろう。「俺達はどこへでもすぐ行ける。拾った古新聞に日光の写真が出ていて、行きたいなと思えばその日汽車に乗る。とにかく俺達は自由だからな……」(角田,1962,p.246.)

とのない固定層である。ホーム・ガードはホボヘミアのホームレスの半数近くを占め、大抵メイン・システムにおいて、未熟練の臨時労働(odd jobs)に従事する。「ホームガード(home guard)」とは「居つきの乞食」という意味で、ホボやトランプから呼ばれる賤称である。彼らの中には、年金生活者や、家族からの送金に頼る「厄介者(black sheep)」も含まれるが、慈善団体や警察の厄介になる者は滅多にいない。また彼らの中には、老齢や、負傷、病気などの理由から、ホボやトランプからこのような固定的な存在へと「転落した(settle down)」した者いる。

最後に、ホボヘミアのホームレスの中で最も下層のタイプとして、バンがいる。彼らの中にはアル中、薬物中毒、高齢者、障害者が含まれ、物乞いをしたり、慈善団体に依存(mission stiff)したりして生活している。

これらホボヘミアに集まるホームレスのさまざまなタイプは、例えば、仕事がなく「オケラ=文無し(broke)」になったホボがシノグために物乞いをしたり、救世軍の行う配給に並ぶ列(bread line)に連なったり、また負傷したり年老いた季節労働者がホームガードやバンへと転落したりすることからわかるように、それぞれのタイプは相互浸透的な側面を持っているが、特にホボの間ではホボ、トランプ、バンの間の区別は厳然として存在している。それは次のような言葉に端的に表される。「ホボは働いて彷徨する。トランプは夢想し彷徨する。バンは酒を飲み彷徨する(Anderson, 1923, p.87)」。このような現象は、「外社会の差別主義の母斑(青木, 1989b, p.97)」として「寄せ場」においても往々にして見られる²⁰⁾が、ある意味でそれはまた働く男としてのホボの矜持の現れでもある。

3) メイン・システム — ホームレスのリアルト —

1) においてその概観を示したホボヘミア地区の中で、「寄せ場」との対比において最も重要な地区は、いうまでもなくループ西側のメイン・システムである。なぜなら、他の地区と異なりこの地区だけが、労働過程と生活過程の双方を含み込んだ「寄せ場」としての機能を有しているからである。ではこの地区にあるさまざまな施設とそこでの暮らしについて、もう少し詳しく見てみよう。

²⁰⁾例えば、炊き出しに並ぶ層と炊き出しを手伝う労働者は、同じ釜ヶ崎の「アンコ」であるはずなのだが、何かの拍子に同じ日雇労働者に対して次のような言葉が出ることがある。「手伝ってくれ言うても手伝いやらん。ボケーッと並んでるだけや。コラ乞食！イナガキんとこ行けや。(1994.9.1.三角公園にて)」その他、直行層と日雇層、労働者とシノギヤ等、差別や相互蔑視、その裏での相互浸透の対立軸はさまざまに存在し、その内のあるものは「誇り」の感覚を表明する資源として用いられることもあるが、こうした事実についてはほとんど指摘されていない。

ホボヘミアにおける生活過程

ホボヘミアは、「寄せ場」と同じくドヤの建ち並ぶ宿屋街(lodginghouse area)でもある。宿にも個室ベッド付き(50セント)から屋根裏部屋(10セント)やドヤ(5セント)まで、ピンからキリまでであった。季節労働者が冬を過ごしにここに戻ってくるため、冬季(12月～3月)は満員になる。値段の他に宿屋の形態も様々で、既に消えつつあったパレルハウスをホテルとして利用したものや、それを用いた救世軍・キリスト教関係の福祉施設、「オリ(cages)」と呼ばれるベニアで仕切っただけの小部屋からなる安ホテル等があった。中でも、1960年代以前の我が国の「寄せ場」において主流を占めていた「カイコ棚」あるいは「大部屋」と呼ばれる方式のドヤを彷彿とさせるような「ドヤ(flophouse)」では、宿泊者は大部屋のむき出しの床やわずかにある木製の寝台で寝なければならなかった。そのようなドヤの一つに泊まったときの体験をアンダーソン自身が記している⁽²¹⁾が、1960(昭和35)年に朝日新聞の一記者が綴った釜ヶ崎のドヤの体験記(柴田,1960.)を参照するならば、両者がいかに似た状態であったかがわかる。

また、ホボの生活は非常に不安定であり、そのことが彼らにその日の生活の糧を得るための独特の手段を発達させる。すなわち、「ホボヘミアにいる者は皆、『コーヒー・アン(coffee-an)⁽²²⁾』レベル以上で生活しようとする。そしてそのために用いられる様々な方法はしばしば巧妙である。こうした、自分にとっての止むに止まれぬ欲求を満たすために何とかして捻り出す日々の営みのことを、『ステム』では『シノグ(getting by)』という(Anderson,1923,p.40.)。そしてホボヘミアでシノグためには様々な方法がある。それらの中には、臨時職(odd jobs)や行商など合法的なものから、街頭詐欺(street faking)や盗み、シノギヤ(jack roller)等の非合法のものまでさまざまである。トランプの中には、街頭演説をし、その後で自ら作った小冊子を持って糧を得ている者もある。このようなシノギ方の多彩さは、「寄せ場」においても豊富に見られる「生活の知恵」である⁽²³⁾が、その中で興味深いのは、物乞いに関するアンダーソンの指摘であろう。

⁽²¹⁾ 「せまく、ガタつく階段、キーキーいうドア、弱々しくて照らされた入り口、夜間管理人に1ダイム渡せば中に入れる。この階で寝ると決めるもよし、三階へ上がるもよし。同じ値段だ。私は二階に決めた。込みようが少なかったのだ。部屋の中央にある大きなストーブの火が暖かい方だったからだ。……(略)……ストーブの周りの男たちは、明らかに風雨に晒されてきたのが分かる。一日中雨だったので、一人は自分の靴を乾かしている。もう一人はシャツを乾かしていた。二人は取り留めのない話をしている。他の者は黙っている。空気は息が詰まるようで、明かりはほの暗い。私は横になる場所を探して部屋を歩き回った。何十人もの男たちが、壁際に頭を向けて寝ている。ある者は新聞の上に、ある者はむき出しの床の上に。」(Anderson,1923,pp.31-33.)

⁽²²⁾ 5セントのドーナツ付きコーヒーのこと。

物乞いには、一時的物乞いと、恒常的物乞いの二種類が指摘されている。例えばあるホボは、酔ったときだけ物乞いをするし、また持ち金を使い果たして、「オケラ」になったときだけ物乞いをする者もいる。すなわち彼らは、自らの心理的・経済的状态によって物乞いをしたりしなかったりと流動的な側面を持っているのである。また物乞いと行商は、相互に軽蔑しあう関係にある。だが彼らも実際には、相互に流動的な側面を有している。これはトランプやホボといった移動層と、ホームガードやバン等の固定層との間にも見られる点である。

このような日常の生活過程において、彼ら相互にどのような人間関係を取り結んでいるのか。この点についてアンダーソンは、ホボやトランプがステムを離れたときの野营地（ジャングル）での様子に描いている。ジャングルは、しばしば鉄道結節点の近くに設置され、そこで彼らは旅の合間の休息と、多くは一夜だけの共同生活を営むのである。そこにはホボやトランプを含むさまざまな「過去」のある人間が一時的にせよ共同の生活を営む以上、そこでの生活はさまざまな暗黙の規範によって支配されている。例えば、以下のようなことは、「ジャングルでの罪(jungle crimes)」であり、発覚した場合、仲間からそれ相応の制裁を受けることになる。それらは、夜中に火を熾すこと、シノギヤをすること、泥酔して暴れること、食べ物に粗末にすること、使った後の食器を汚れたままにすること、最初に火を熾さずに調理すること、道具を壊すこと等である(Anderson,1923,p.20-21.)。また、そこでの彼らはまさに「ヨタ話」の達人であり、自らの冒険にまつわる手柄話を、そこで互いに開陳し合う。だが、そのような取り留めのない話の中で、「個々人の過去だけは本人だけの秘密(Anderson,1923,p.20.)」である。しかも、ジャングルへの出入りについても、「彼らは挨拶なしにやってきて、去る。かろうじて『あばよ』と言うくらいである(Anderson,1923,pp.19-20.)」ことから分かるように、彼らの相互作用はいわば臨時的・匿名的關係規範に支配されているといえることができる。こうした彼らの關係規範は、そのまま「寄せ場」の人間關係にも当てはまる⁽²⁴⁾。

以上「寄せ場」との比較を念頭に置きながら、ホボヘミアにおける生活過程の特徴の幾つかを示した。では次に労働過程に目を転じてみよう。

⁽²³⁾ 「寄せ場」でのシノギ方も実にさまざまであり、飯屋の雑役、サンドイッチマンといった臨時職(odd jobs)から、バタヤ、露天商、田舎回り(working the folks)、売血等があった。(寺島(編),1976,pp.153-154.)

⁽²⁴⁾ 「ここに来た理由ってのは、そういうもんは推測すれりゃわかるだろ。みんな、一緒だ。おたくが推測しているとおりだ、そんなもんだ」(西澤,1992,p.142.);ちなみに西澤は、「みんな一緒だ」という感覚の奥に潜在する「不可視の共同性」を読みとるが、本稿では、さしあたりその解釈の適否に関する判断は留保しておく。

ホボヘミアにおける労働過程

当時シカゴは、アメリカ合衆国で最大の労働市場であり、推定で少なくとも年間約25万人がシカゴの労働紹介所を通して就労していた(Anderson,1923,p.111.)。労働紹介所は、民間のものと公設のものに分かれる。

民間の労働紹介所は、セントラル通り沿いとマディソン通り沿いにあり、シカゴ全体で200以上ある内の50程度が、ホボヘミアのホームレス相手のものである。それらは、毎日の紹介物件を軒先に張り出す、労働者はそれらを「物色(window shopping)」し、気に入った条件の仕事であれば契約を交わす。彼らに好まれる仕事は、州をまたがる長旅(long-distance interstate shipments)であり、たとえそのために賃金が多少悪くとも彼らはこうした仕事に就こうとするのである。

公設の労働紹介所は、熟練工用、未熟練工用、黒人用に分かれて三カ所ある。だが民間に比べて人気がない。その理由は、メイン・ステムの近くにないで気づかれにくいことや、民間のように「物色」するように物件が張り出されていないこと、また名前や就労の確認等をうるさくする「官僚的形式主義(red tape)」が労働者に嫌われること、また上述のように民間の紹介する仕事の方が魅力的であること、民間紹介所の競争原理に公設紹介所が対抗できないことなどが挙げられる⁽²⁵⁾。

また、これらの労働紹介所で紹介される仕事は以下のようなものが代表的である。小麦・とうもろこし・果物・綿花等の農作物の収穫作業においては、例えば小麦の収穫の場合、6月はオクラホマ、11、12月はノース・ダコタやカナダへと移動する⁽²⁶⁾。建設労働においては、当時盛んであった鉄道の敷設、その他大工や石工、煉瓦工やコンクリート工として働く。漁業においては、太平洋岸での鮭漁や大西洋岸での牡蠣漁には経験者が求められる。羊毛刈りも技術職であり、短期で金になる職種である。氷の切り出しにおいては、冬季に需要の高い職種であるが、製氷工場ができたおかげで天然の氷の需要は減ってきた。木材の切り出しにおいては、工場の設備改善と、北部、西部への進出により、季節に関わらず操業できるようになった⁽²⁷⁾。このように、いずれも季節変動が激しく、そのために高い移

⁽²⁵⁾このような民間対公設の労働紹介をめぐる状況も、「寄せ場」との比較において捉えるならば、例えば釜ヶ崎の西成労働福祉センター開設当時の手配師との関係を彷彿とさせる。1961年の釜ヶ崎第一次暴動の直後に府労働部西成分室（センターの前身）が開設された。これは当時から問題が多く、暴動時の攻撃対象の一部ともなった民間の手配師に代わって就労紹介を行政が行おうとするものであったのだが、開設直後から紹介の不手際や、賃金の問題等でトラブルが絶えず、ついに民間の手配師を「就労連絡員」という名目で取り込まなければ機能し得なくなってしまったのである。

⁽²⁶⁾「常時10人を雇傭する小麦農場は収穫期に300人を必要としたのである。」(野村,1971,p.135.)

動性を必要とする職種が多い。

彼らは、これらさまざまな仕事をどのようにすれば得ることができるのか、どこへ行けば得られるのかよく知っている。これらの高い移動性を伴う比較的長期契約の労働は、季節労働者やホボが就労することになるが、その他の日雇労働を含む短期的な労働(casual labor, odd jobs)は、固定層のホーム・ガード達に人気がある。

また、移動労働者にとってこれらの仕事の労働条件は、かなり過酷なものであった。「なぜなら移動労働者の移動は屢々噂と希望に基づいた無計画的なものであり、多量の時間が当てもない移動に費やされ、やっと短期の仕事が得られ、さらに短期の雇用で得た賃金で長期の失業期間の生活を支えねばならなかったから(野村,1971,p.138.)」である。また「極度の長時間労働が多く、同じ仕事に1カ月以上留まろうと決心しても重労働による肉体的苦痛のために数日間でその仕事を離れざるを得ない場合も多かったといわれる。その上危険な作業が多く、頻繁な事故を伴った。食事内容は貧弱であり、またあらゆる種類のキャンプでtruck制度⁽²⁸⁾がはびこっており、町から遠いため労働者は法外な値段でcamp storeから買うことを余儀なくされた(野村,1971,p.138.)」のである。

さらにホボのタイプのところで述べたように、彼らの移動手段は運行中の列車への飛び乗り、飛び降りや警察との遭遇等、大変な危険を伴っていた。例えば1919年一年間に、鉄道の不法侵入者で死亡したものは2,533人、負傷したものは2,658人が記録されているが、このうち多くがホボやトランプであっただろうと思われる(Anderson,1923,p.161.)。

4 「寄せ場」とホボヘミア——都市生態学的比較——

以上、紹介してきたホボヘミアは、その都市生態学的特徴が、「寄せ場」(とくに1960年代以前の「寄せ場」=釜ヶ崎)の状況とかなり近似的であるといえる。ここでいう都市生態学的特徴とは、地理的特徴と、そこに集まる者の社会的存在様式の双方を含む。そう

⁽²⁷⁾「西部林業は需要の急増と膨大な森林資源を背景に、その伐採方法は1つの森や山をたちまち裸にして次に移るという"cut and get out"方式が支配的であり、林業自体が高度の移動性をもっていたのである。」(野村,1971,p.136.)

⁽²⁸⁾現物供与制。寄せ場労働者においても、「出張」「契約」といわれる遠方の飯場に宿泊する長期の仕事の時には、「食い抜き」といわれる雇用契約を取り結ぶのが普通であり、一日あたり賃金の二割から悪くすれば三割以上が「飯代」として差し引かれる他に、現場が町から離れていれば、同じように法外な値段で酒、煙草他の日用品を買うことを余儀なくされる。これでは一、二週間の契約期間中に数日間雨が降って「手待ち」の日々が続けば、契約後に手元に残る賃金は微々たるものになることも稀ではない。

した意味での都市生態学的特徴という点から、ホボヘミアと「寄せ場」の間の類似性についてここでまとめておこう。

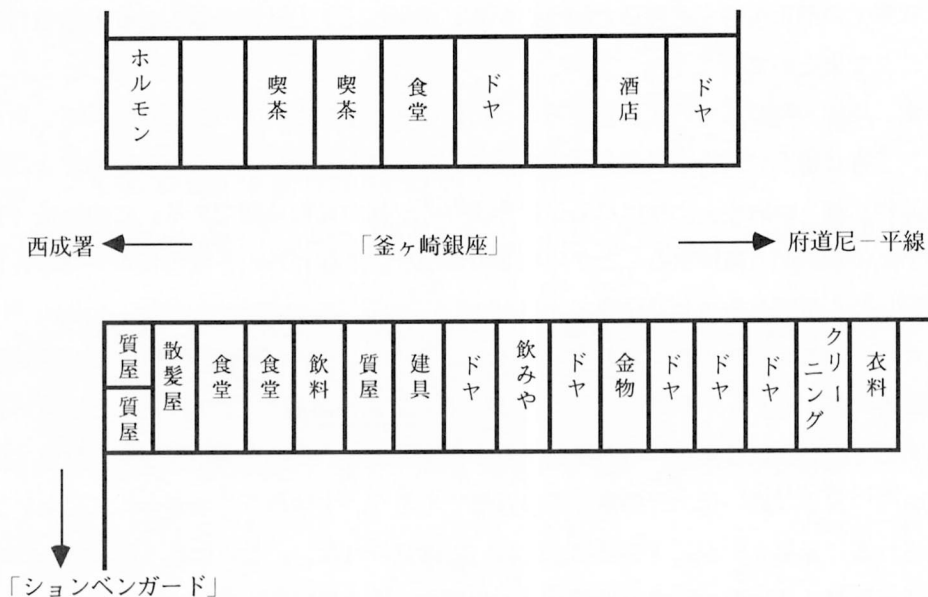
まず、地理的特徴についてみると、いわゆるドヤ街としての街並において、ホボヘミア、「寄せ場」の双方が大変似通っている。図1はメイン・ステムの中心部および釜ヶ崎の通称「釜ヶ崎銀座」と呼ばれる目抜き通りの一部の見取り図である。この図を一目見て、上記の指摘が当てはまるのが分かるであろう。すなわち、多数のドヤや商店、食堂等がひしめく街並みを呈している。

また両者の都市空間上の位置においても、ホボヘミアは中心商業地区(loop)近傍の鉄道路線の集中する地区に、釜ヶ崎はJR環状線(旧国鉄関西本線)、南海本線、南海阪堺線、南海天王寺線(現在は廃線)の四線が交差する地区にと、共に交通の至便地に位置する。ただ、一つ大きな違いは、労働紹介所の有無であろう。すなわち、ホボヘミアにおいて多数見られる労働紹介所が、「寄せ場」においては見られない。これは、「寄せ場」における就労形態が、地区内の特定の場所⁽²⁹⁾での早朝の青空市場に限られているためである。そこで日雇い労働者は、手配師によって拾われるのを「たちんぼ」をして待つのである。

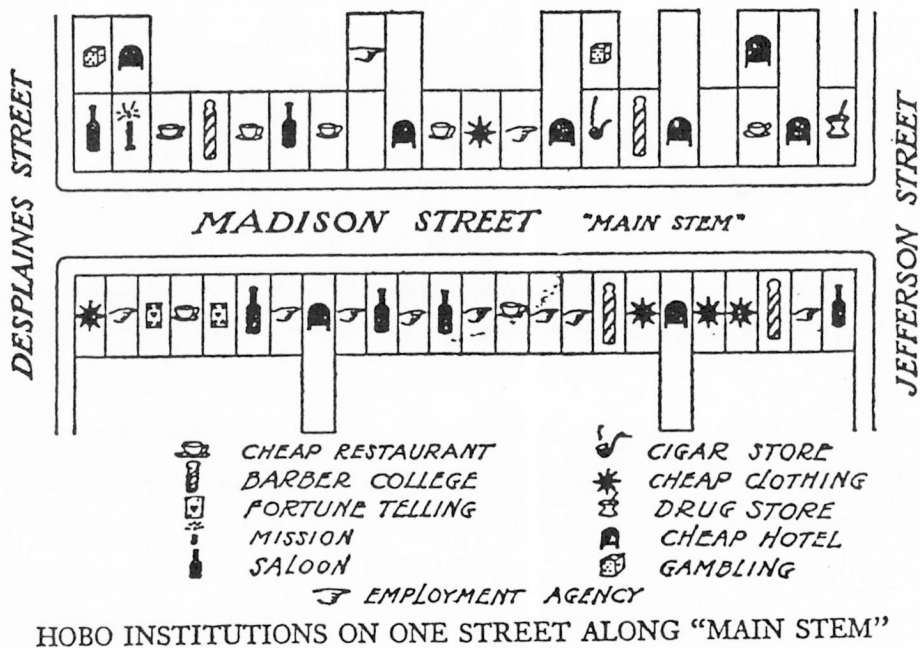
次に社会的存在様式についてであるが、青木は、「寄せ場」とスキッド・ロウとを、居住者の社会的属性、人間関係の性格、生活・社会意識等を比較し、六点わたってに整理している(青木,1989b,pp.56-57.)が、ここでは基本的属性、生活過程、労働過程、その他の四点から、ホボヘミアと「寄せ場」を比較しておく。

まず、彼らの基本的属性の点では、ホボも寄せ場労働者も共に、単身のホームレスの男性がほとんどである。そして、年齢構成で見た場合、ホボは18~35歳(Anderson,1923,p.120.)、1965年当時の釜ヶ崎の労働者も20代~30代を合わせて70%を越えていたとされる(上畑,1991,p.5.)ように、共に壮年層が主体であった。また、彼らの間の階層の点では、ホボヘミアは、「エリート」の季節労働者から窮民層のパンまでが、一種の階層構造を形成していた。同様に、「寄せ場」にも「半」常雇いの熟練労働者から老人や身体障害者等の「被吸血的窮民層」、シノギヤや犯罪者等の「ルンペン・プロレタリアーと」までが階層構造をなしている(青木,1989b,pp.151-153.)。また、両者の文化の中心的担い手はそれぞれホボ、アンコと、共に階層構造の中間に位置する移動性の単身労働者である。このように、基本的属性の点では、ホボヘミアと「寄せ場」はほぼ同様の性格を有しているといっていよう。

⁽²⁹⁾釜ヶ崎においてそれは、現在では愛隣総合センター1Fの寄り場であり、センターができる以前は、霞町交差点付近や南海本線西側の路上であった。



釜ヶ崎の街並み（住宅協会（編）『大阪市全住宅案内図帳』,1964.より作成）



HOBO INSTITUTIONS ON ONE STREET ALONG "MAIN STEM"

ホボヘミアの街並み（Anderson,1923,p.15.より転載）

図1 「寄せ場」とホボヘミアの街並み

次に、彼らの生活過程の点で比較すると、両者とも、ドヤの内実は同様である。ただ、「寄せ場」の場合、1970年前後から、外見は近代的なビルへと変わってきた。また、彼らの生活文化的な面において、共に生活様式としての独特の文化が存在していた。例えば、それは特定の労働の選択に関わる共有された知識であったり、シノグためのさまざまな生活の知恵であったりする。また、彼らの日常の人間関係は、臨時的・匿名的関係規範に支配されている。さらに、彼らの階層構成と生活の不安定さに関わり、相互に地位が流動的な側面や、互いに相手を軽蔑し合う関係が一面では見られる点も共通している。しかし、両者の「移動」に関する態度において、ホボと寄せ場労働者の中で重要な違いがある。両者ともに移動性の労働者であり、生活様式は恣意性、低位性、仮宿性の原理(青木, 1989b, p. 161.)によって支配されていることは共通しているのだが、ホボの「移動」に関する態度は、寄せ場労働者のそれに比べて能動的である点が異なっている。ホボを衝き動かす原理である「旅心(wanderlust)」は、寄せ場労働者にとっては生活の中心原理ではない。したがって、(誤解を恐れずにいえば)多くのホボにとってホボヘミアは「途中下車駅」でしかないのに比べて、寄せ場労働者の多くにとって「寄せ場」は「終着駅」なのである。

また、労働過程の点では、まずその階級的な性格において、ホボも寄せ場労働者も共に、「景気の安全弁⁽³⁰⁾」として利用される最下層の不安定労働者である点は共通している。また、それに伴って、労働条件が劣悪である点においても共通しているが、ホボにおける季節毎の大規模な移動に対して、寄せ場労働者の場合は、その日限りのいわゆる「現金」仕事を中心である点が大きな違いである。さらに仕事の内容に関しても、寄せ場労働者の場合は、建設・港湾労働が中心である点も異なっている。このような労働過程に伴う移動の規模の差異が、両者の「移動」に対する態度の差異と大きく関わっているだろう。また組織化の点では、ホボヘミアにおいては、世界産業労働者組合(Industrial Workers of the World)や国際友愛福祉協会(International Brotherhood Welfare Association)等のホボのための団体が、釜ヶ崎においては、ようやく1969年にはあるが全港湾建設支部西成分会が結成される等、一定の労働者組織化の試みが見られた。しかしその組織化は、彼ら相互の臨時的・匿名的関係規範に根ざす一定の限界と問題点をはらんでいた。

最後にその他に、ホボヘミアと「寄せ場」の比較において見過ごしてはならない最大の違いがある。それは暴動の有無である。周知のように、「寄せ場」においては、1960年の山谷第一次暴動、1961年の釜ヶ崎第一次暴動⁽³¹⁾をはじめとして、過去数十回の暴動を経験

⁽³⁰⁾「好況の時には安価な労働力として、不況の時には退職金もいらぬ使い捨ての余剰物として、『寄せ場』労働者はあつかわれてきた。……(略)……景気の安全弁として、寄せ場労働者は不可欠の存在なのだ。」(池田, 1988, p. 8.)

している(釋,1973.)。

このように、かたや1920年代アメリカ合衆国、かたや1960年代日本と歴史・社会を異にするにも関わらず、ホボヘミアと「寄せ場」は都市生態学的に見てこのように多くの側面を共有するのである。その意味では、ホボヘミアはアメリカの「寄せ場」だったのであり、逆に言うならば、「寄せ場」は日本のホボヘミアなのである⁽³²⁾。ただ、その中には、(当然ながら)単純な類比を許さない重要な差異も存在する。そしてその最も重要なものとして、両者の「移動」に対する態度の差異と、「寄せ場」における暴動の発生を挙げることができる。このうち前者は、ホボヘミアと「寄せ場」における労働過程の違いと切り離して捉えることはできない。すなわち、広大な国土を持ち、季節的な州にわたる移動を不可避に伴う当時のアメリカの下層労働力需要と、国土が狭く、主に都市部における建設・港湾労働力の調節要因として求められる日本の下層労働力需要との差異が、両者の「移動」に対する態度の違いと密接に関連していると考えられるのである。ただ、そうした違いにも関わらず、ホボヘミアと「寄せ場」の生活過程は、彼らの労働過程の特質によって規定されるということだけは、共通していえるのである。そして、この点が、次に述べる、ホボヘミアがその後辿った運命を決定づけるのである。

5 その後のホボヘミア

以上、『ホボ』に描かれたホボヘミアと「寄せ場」の比較を通して、両者の類似点と差異を若干検討したわけだが、ある意味でアメリカの「寄せ場」といえるホボヘミアは、後にアンダーソン自身が「『ホボ』はそれが書かれた頃には時代遅れになっていた(Anderson,1940,p.3.)」と述懐するように、急速に消滅への道を進んだ。当時アメリカには北部の多くの都市⁽³³⁾にホボヘミアのような「メイン・ステム」が見られたのだが、「1920年代中層にホボの時代は終わった(Snow & Anderson,1993,p.14.)」のである。

アンダーソンは、後に『移動する人々』の中で、1940年のホボヘミアの様子を描いている(Anderson,1940,pp.12-16.)。まず、メイン・ステムのドヤや安食堂や古着屋、散髪学校は

⁽³¹⁾釜ヶ崎第一次暴動の経緯と、その中での群集行動の分析は、拙稿(1994.)参照。

⁽³²⁾実はこのような指摘は、既に土田によってなされている。だが、わが国のドヤ街は「40年前のシカゴのHoboの日本的現代版である(土田,1966b,p.213)」と指摘した土田自身によっても、また60年代都市社会学を否定し去ったその後の寄せ場研究者達によっても、この着眼点はそれ以上に深められることはなかった。

⁽³³⁾クリーブランド、シカゴ、ミネアポリス、オマハ、カンサス・シティ、デンバー、ソルト・レイク・シティ、シアトル、ポートランドがそうであった。(Anderson,1940,p.48.)

まだあったが、ダンス・ホールやバレル・ハウスのあったループ南側の「色町(color spot)」は姿を消した。労働紹介所も、紹介する仕事がなくつぶれてしまった。つまり、ホボヘミアは地区としてはまだ存在していたのだが、ホボヘミアの生活文化を支えた主役たるホボは、その後の移りゆく社会情勢の中で必要とされなくなったために、地区からは労働過程に付随する施設がなくなってしまったのである。

その原因として、スノウとアンダーソンは次の四つを挙げている(Snow & Anderson, 1993,p.14.)。すなわち、1)農業の機械化の進展によって、季節農場労働者の市場が縮小したこと、2)アメリカ経済の成長によって、労働者の常用化が進んだこと、3)ホボの生活を支えていた鉄道が、交通革命によって自動車へと転換してきたこと、4)さらにその鉄道も蒸気機関からディーゼルへと転換したことによって、不法な乗り降りが困難になってしまったことの四つの要因が重なることによって、ホボは社会的に必要とされなくなり、その結果ホボヘミアはかつての「奴隷市場」としての役割を終えたというのである。つまり、ホボの労働過程をめぐる環境の変化が、ホボヘミアという独特の都市生態学的空間の様相を一変させたのである。そしてホボヘミアは、その独特の社会的存在様式を「スキッド・ロウ」へと変貌させてゆくのである⁽³⁴⁾。

おわりに——「寄せ場」の社会変動研究へ向けて——

ホボヘミアと「寄せ場」の比較を通して、われわれは一つの単純な問いを主題化することができる。すなわち、一方はその社会的存在様式としては消滅し、他方は未だに存続している。この違いはどこから来るのであろうか？特に我が国の「寄せ場」について考える場合に、この問いに答えることは、ホボヘミアが辿った歴史的経緯を睨んだ上での、「寄せ場」の社会変動とでもいうべき問題領域に、従来とは異なった視点からアプローチする可能性をわれわれに示してくれる。

この点に関し、従来の「寄せ場」の社会変動に関する叙述は、「寄せ場」の形成史および、それが果たしてきた「景気の安全弁」としての不可欠の役割に注目し、「寄せ場」の辿ってきた道筋そのもの、そして現在にいたる「寄せ場」という独特の社会的存在様式の存続を、産業構造やそれに根差した国家政策上の需要（「近代化」！）の直接のアウトプッ

⁽³⁴⁾ただしこのことは、アメリカ社会から最下層の臨時的労働力の存在が消え去ったということの意味するのではない。それは、移民などの他の層によってとって変わられたか、あるいは単にホボが就いていた特定の職種が必要とされなくなったかによって説明できるかもしれないが、この点に関する説明は、今後の課題である。

トとして、いわば近代資本主義社会の論理的必然として捉える傾向にあった。それは例えば次のような表現に典型的である。「釜ヶ崎の歴史を問うことは釜ヶ崎を必要とする、あるいは不可欠の一分枝とする近代社会の歴史を問うことであり、また釜ヶ崎の変容を明らかにすることはそのような変容を必然化せしめた全体社会の動向を明らかにすることでもあるはずです(本間,1993,p.24.)」。

確かに、釜ヶ崎の変容は全体社会の動向と不可分の関係にあることは間違いないが、だからといって近代社会が釜ヶ崎を「不可欠の一分枝」として必要としていることが「必然」であるとは、必ずしもいえないのである。いうまでもなく「寄せ場」は、最下層の不安定労働者層（それは資本の労働力調達・調整にとって誠に都合の良い存在である）の集住する地域であり、労働者としての権利がほとんど保障されていない彼らは、建設業界の重層的の下請構造とも相まって、労働に対する正当な対価を不当に「搾取」されてきた。ウォーラステインは、「史的システムとしての資本主義」における「商品化」について次のように述べている。「こうした商品の連鎖における全てのサブ・プロセスが商品化されてしまうとは限らない。というより、そんなことは一般的でさえないのだ。……(略)……こうした連鎖においては、バランス・シートにコストとして記載されるはずの、何らかの種類の報酬を受け取る大量の、分散的な労働者群が存在しているということがそれである(Walkerstein,1983=1985,p.8.)」。ここで言われていることは、搾取されるべき「コスト」としての不安定労働者層は、確かに「史的システムとしての資本主義」にとっては、資本の蓄積を自己目的とする社会システムの論理から必然的に要請される事態であるということである。

しかし、「コストとして記載される」不安定労働者層の存在は、そのまま「寄せ場」という独特の都市生態学的特徴を有する地域の存在を意味するわけではない。つまりそうした地域は、「『ベルト』的に全国の底辺に拡がるこのような層の、一時的滞留地区として、その僅かな露頂たるもの(江口他(編),1979,Ⅶ)」としての、むしろ一箇の歴史的事実なのである。したがって、例えば釜ヶ崎が近代社会の「不可欠の一分枝」であるという場合、それは釜ヶ崎を不安定労働者層の象徴として捉えている限りにおいて妥当な表現なのであり、「寄せ場」という地域と、その地域の持つ都市生態学的特徴の存在は、近代資本主義社会によって論理必然的に保証されたものではなく、姿を変えたり、あるいは消滅してしまうこともあり得る存在であるということをわれわれは確認しておかねばならない。

そのように考えると、5節でみたホボヘミアの辿った運命を「寄せ場」に重ね合わせて、「寄せ場」を、「あるいは消えていたかも知れない存在」として捉える視点が生じてくる。そしてこのような視点から「寄せ場」の社会変動を捉えるとき、そこからは、「寄せ場」

の変動要因を、従来とは異なった角度から捉え直す可能性が生じるだろう。

ただ本稿は、ホボヘミアの紹介を、「寄せ場」との比較において行うことを主眼としているため、「あるいは消えていたかもしれない存在」としての「寄せ場」を存続させてきた要因の考察にまでは踏み込むことができなかった。したがって、このような視点から「寄せ場」の社会変動を分析していくことは、今後の課題としたい。

引用・参考文献

- Anderson, Nels., 1923, *The Hobo: The Sociology of the Homeless Man*, The University of Chicago Press.
- Anderson, Nels., 1940, *Men on the Move*, The University of Chicago Press.
- 青木秀男, 1988, 「『寄せ場』研究の諸問題」、『寄せ場』、第1号、37-49頁
- 青木秀男, 1989a, 「スクオッター研究をめぐる諸論点」、『寄せ場』、第2号、93-101頁
- 青木秀男, 1989b, 『寄せ場労働者の生と死』、明石書店
- 江口英一・西岡幸泰・加藤佑治(編), 1979, 『山谷——失業の現代的意味——』、未来社
- Gouldner, Alvin W., 1968, "The Sociologist as Partisan: Sociology and Welfare State", *American Sociologist*, 3, pp.103-116.
- 本間啓一郎, 1993, 「釜ヶ崎小史試論」、釜ヶ崎資料センター(編)『釜ヶ崎——歴史と現在——』三一書房、24-67頁
- 宝月 誠, 1990, 『逸脱論の研究——レイベリング論から社会的相互作用論へ——』恒星社厚生閣
- 池田浩士, 1988, 「新しい『学』をめざす『寄せ場学会』——創立一周年をむかえての展望——」、『出版ニュース』、4/上、8-11頁
- 亀井俊介, 1993, 『アメリカン・ヒーローの系譜』、研究社出版
- 小柳伸顕, 1980, 「都市社会学は釜ヶ崎差別を再生産する」、『季刊 釜ヶ崎』、第1号
- 松繁逸夫, 1992-3, 「寄せ場考」、『日刊えっとう』
- 中根光敏, 1993, 「『寄せ場』をめぐる差別の構造」、広島修道大学総合研究所
- 日本寄せ場学会, 1988, 『寄せ場 第1号』、現代書館
- 西成労働福祉センター, 1963, 「西成地区日雇労働者の就労と福祉のために——創設と事業の概要——」
- 西澤晃彦, 1992, 「寄せ場のエスノグラフィー——不可視の共同性——」、金子勇・園部雅久(編)『都市社会学のフロンティア 3』、日本評論社、119-154頁
- 野村達朗, 1971, 「I.W.W.と西部の移動労働者」、『アメリカ研究』5、132-152頁
- 柴田俊治, 1960, 「連載 大阪のどん底"釜ヶ崎"に住んでみて③」、『大阪朝日新聞』、2/11.
- Snow, David. & Leon Anderson., 1993, *Down on Their Luck: A Study of Homeless Street People*, University of California Press.
- Solender, Alice W., 1911, *One Thousand Homeless Men*, New York: Russell Sage Foundation.
- 釋 智徳, 1973, 「大坂貧民史の研究1」、華頂短期大学『研究紀要』第十七号、91-166頁
- 釋 智徳, 1989, 「釜ヶ崎今昔考(その一)——明治以前の釜ヶ崎——」、『大阪春秋』18、148-151頁
- 寺島珠雄(編), 1976, 『労務者渡世——釜ヶ崎通信——』、風媒社
- 角田房子, 1962, 「女一人釜ヶ崎をゆく——彼らにとってなぜそこは住み良い場所なのか——」、

『文芸春秋』第40巻、12月号、242-254頁

土田英雄, 1966a, 「ドヤ・ドヤ街・ドヤモン」、『都市問題研究』第18巻第12号、54-64頁

土田英雄, 1966b, 「ドヤ街の比較研究」、『大阪学芸大学紀要 A. 人文科学』No.15, 203-215頁

上畑恵宣, 1991, 『変貌する釜ヶ崎（あいりん地区）——釜ヶ崎30年の重み センターの役割——』、
(未公刊パンフレット)

Wallerstein, Immanuel., 1983, *Historical Capitalism*. = 川北稔訳、『史的システムとしての資本主義』、岩波書店、1985.

山崎カヲル, 1989, 「ラテンアメリカとバリオ」、『寄せ場』、第2号、102-121頁

吉田竜司, 1994, 「群集行動と日常性——釜ヶ崎第一次暴動を事例として——」、『ソシオロジ』、
第39巻第2号、75-95頁

(よしだ りゅうじ・博士後期課程・日本学術振興会特別研究員)

付記 本稿は平成7年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。

Hobohemia and “Yoseba”: Toward the Social Change Study of “Yoseba”

Ryuji YOSHIDA

This article presents a perspective on the study of the social change of “Yoseba” through a comparative study with “Hobohemia”.

In his famous ethnographic study, *The Hobo: The Sociology of Homeless Man*, Nels Anderson described a vivid picture of both the migratory worker’s world in 1920’s America and their home, “Hobohemia”. From the urban-ecological point of view, some characteristics of this unique urban district are very similar to those of “Yoseba” which is one of the daily wage earner’s districts in Japan. In particular, the similarity of 1) the geographical pattern of both districts and 2) the life-style of hobo and “Yoseba” labor is remarkable.

But these two districts took very different course each other. “Hobohemia” had disappeared by the late 1920’s. And it changed its character into a *rubbish heap* of paupers, “Skid-row”. On the contrary, “Yoseba” has survived till now. And it still fulfills its function to meet the demand for the lower manual labor.

These urban-ecological resemblance and historical difference between them pose a question to us about the conditions on which “Yoseba” has been able to subsist. So we present a new perspective on the social change of “Yoseba” for the further inquiry into this problem. In this perspective, “Yoseba” should be seen as “maybe-vanished” existence.

To see “Yoseba” in this manner will reexamine the historical course it had taken and the *raison d’être* of it under the “historical capitalism”.